

1

台頭するアメリカの光と影

アメリカの独立から今日の繁栄に至る200年強の時間の中で、どのようなことが起こったのかを理解しておくことは、英語の理解のみならず、アメリカを取り巻くさまざまな社会現象や問題を理解する上でも役に立つ。

(1) 自由・平等の基本的人権を掲げた独立宣言

We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal, that they are endowed by their Creator with certain unalienable Rights, that among these are Life, Liberty and the pursuit of Happiness. [The Declaration of Independence (July 4, 1776)]

すべての人間は生まれながらにして平等であり、その創造主によって、生命、自由、および幸福の追求を含む不可侵の権利を与えられている、という真理は自明であると我々は信じる。

アメリカ独立宣言 (The Unanimous Declaration of the thirteen United States of America, The Declaration of Independence) は、のちに第3代アメリカ合衆国大統領になったトーマス・ジェファソンが起草し、ジョン・アダムズとベンジャミン・フランクリンによるわずかな修正を経て、1776年7月4日の第2回大陸会議の決議 (The Action of Second Continental Congress) として、13州のアメリカ合衆国による全会一致で採択された。これによりイギリス植民地から独立した実質的なアメリカ合衆国が誕生した^{注5)}。7月4日はアメリカ合衆国の独立記念日 (Independence Day) として祝日になっており、毎年各地で盛大に祝われる。独立宣言には、ジョン・ロックの自然法思想に基づいて、生命、自由、および幸福の追求を含む不可侵の権利 (unalienable rights) が高らかにうたわれている。

この独立宣言を署名した56名のうち、8名が外国生まれであった。出身別では、イングランド2名、スコットランド2名、ウェールズ1名、アイルランド3名である。当時のイギリスは、1707年にイングランドとスコットランドが合併してできたグレートブリテン王国 (The Kingdom of Great Britain)^{注6)} であり、イングランド、スコットランド、ウェールズの3国で構成されていた。

当時のイギリス政府の中心であるイングランド出身者が2名いるということは、植民地アメリカに対するイギリス政府の扱いがかなりひどかったことを暗示している。その他のスコットランド、ウェールズ、アイルランド出身者は、おそらくケルト人であり、アングロ・サクソン人主体のイングランドに対する潜在的な反感もあったと思われる。

注5) アメリカが独立国家として正式に承認されたのは、1783年のベルサイユ条約によってである。

注6) 現在のイギリスの正式名称は、The United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland であり、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの4国で構成されている。イングランドによるウェールズの正式併合は1536年、スコットランドの合併は1707年、アイルランドの合併は1801年である。ただし、民族的に見ると、『狭義のイギリス』を意味するイングランドは、主にアングロ・サクソン人であり、スコットランド、ウェールズ、アイルランドはケルト人である。アメリカでは、長い間、ワスプ WASP (White Anglo-Saxon Protestant ホワイト、アングロ・サクソン、プロテスタント)、すなわち白人でイングランド出身のアングロ・サクソン人を先祖に持つプロテスタントが大統領をはじめとする社会の頂点に立つ者の条件とされてきた。このワスプ神話を打破したのが、ジョン・F. ケネディ (John Fitzgerald Kennedy) である。彼の先祖は、アイルランドからの移民であり、ケネディ一家は民族的にはケルト人でカソリック教徒であった。また白人という条件を初めて打破したのが、オバマ大統領 (President Obama) である。

(2) 南北戦争と奴隷解放宣言

人間の基本的な人権を高らかにうたって誕生したアメリカではあったが、わずか13州のアメリカ合衆国であり、奴隷制度も存在し、理想と現実はかい離れたままであった。そして、その内部矛盾は、奴隷制度を認めない北部 (アメリカ合衆国) と奴隷制度維持を主張する南部 (アメリカ連合国: The Confederate States of America)^{注7)} との対立から、1861~1865年の4年間に及ぶ南北戦争 (The Civil War) へと発展した。

注7) アメリカ連合国 (The Confederate States of America) は、アメリカ合衆国が

⁸And the LORD God planted a garden eastward in Eden; and there he put the man whom he had formed.

⁹And out of the ground made the LORD God to grow every tree that is pleasant to the sight, and good for food; the tree of life also in the midst of the garden, and the tree of knowledge of good and evil.
[Genesis 2:8-9]

主なる神は、エデンの東方に一つの園を設けて、造った人をそこに置かれた。また主なる神は、見て美しく、食べるのによいすべての木を土から生えさせ、さらに園の中央に命の木と、善悪を知る木とを生えさせられた。[創世記 第2章 8-9 節]

¹⁶And the LORD God commanded the man, saying, Of every tree of the garden thou mayest freely eat:

¹⁷But of the tree of the knowledge of good and evil, thou shalt not eat of it: for in the day that thou eatest thereof thou shalt surely die.

[Genesis 2:16-17]

thou mayest = you may

主なる神はその人に命じて言われた。「園のどの木からでも自由にとって食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」[創世記 第2章 16-17 節]

■ アダムとイブが、神から禁止されていたことを破り、エデンの園の中央にあった知恵の木の実を食べたために彼らは楽園を追われた。アダムとイブの行方は、人類最初の罪で原罪 (the original sin) と呼ばれ、その罰として、神は人間に、①女には子を産む苦しみ、②男には額に汗して労働する苦しみ、③すべての人間に命の期限を与えた。

語句

- The Garden of Eden エデンの園 (アダムとイブがすんでいた楽園)
- eastward 東方へ [に]
- in [into] the midst of ~ ~の中に [へ]、~のただ中に [へ]
- good and evil 善悪
- the knowledge of good and evil 善悪の認識
- the tree of (the) knowledge (of good and evil) 知恵の木、善悪を知る木

7 [イディオム] **by [in, with] the sweat of one's brow [face]**

額に汗して (働く、努力する)、正直に働いて

¹⁹**In the sweat of thy face** shalt thou eat bread, till thou return unto the ground; for out of it wast thou taken: for dust thou art, and unto dust shalt thou return.

[Genesis 3:19]

- thy = your thou = you shalt thou = you shall
 wast thou taken = you were taken dust thou art = you are dust
 unto dust shalt thou return = you shall return to dust

お前は額に汗してパンを食べ、土から取られたのだから最後は土に帰るのだ。お前は、ちりだから、ちりに帰るのだ。

[創世記 第3章 19節]

■アダムとイブの原罪の罰として、男は額に汗して労働する苦しみを背負うこととなった。

語句

- dust ちり cf. the dust (ちりに帰るべき) 肉体、人間
 cf. We are but a handful of dust. 我々はひと握りのちり [死んで土に帰るべきもの] に過ぎない
 cf. lick the dust ちりをなめる、敗北する、殺される
 cf. Ashes to ashes, dust to dust 灰は灰に、塵は塵に (葬式に用いる言葉)
 cf. dust and ashes ちりと灰、失望させるもの、つまらないもの
 cf. turn to dust and ashes (希望が) 消えうせる、台なしになる

8 [キーワード] **Cain and Abel** カインとアベル[イディオム] **Am I my brother's keeper?**

私は弟の番人でしょうか。(私の知ったことではない)

[イディオム] **the mark [brand] of Cain**カインの烙印らういん(殺人者のしるし、不名誉のしるし)